

# PHAYAO レポート 2013-02 (大学生・現地レポート) -②

徳島大学、山口県立大学、現地大学 CRRU (2013.8/19~31)

## 『自立と交流』

### ～タイ山岳少数民族フィールドワーク～<sup>1</sup>

#### はじめに

私たちは2013年8月19日～31日までタイでフィールドワークを行った。

調査の目的は2つある。第1に、少数民族が多く通うチェンライ大学で少数民族の文化を学び、学生とディスカッションを行う。

第2に、NPO 法人シャンティ山口が支援している少数民族の村を訪問し、交流を行う。

今回のフィールドワークを通じて、交流により人種差別や偏見が解消されること、および自立にはひとりひとりの意識の自立が大切であることを学んだ。

つまり、他国に関心を持ち、自国を見つめなおすことや、自国の文化や知識を知り、伝えることが大切である。



## 第1章 夢に向かってがんばるシャンティ寮の子どもたち

国際文化学科 4年 上田聡子

8月23日から26日までの3日間タイのポングという町にあるシャンティ寮へ滞在した。この施設は15年前にシャンティ山口と山口県曹洞宗青年会などが建設したものである。少数民族のモン族やアカ族の中・高生約50人が共同生活をしている。少数民族の子どもたちは深い山あいの貧しい村で生活をしており、険しい山道を下山し、遠い学校に通学することはとても現実的なことではなかったという。寮が出来てからは、寮から学校へ通うことが可能となったという。

ここでの生活は全て寮生が自分たちで管理している。掃除、洗濯はもちろんのこと、食事も当番を決め、全員分の食事を用意していた。また農業も行い商品作物の生産・販売などしながら、最小限の



【シャンティ寮・事務所】

支援の下、自立した生活を行っていた。彼らと共に過ごす中で、寮生活を切り盛りしている彼らには勉強と向き合

<sup>1</sup> 報告書の作成にあたり、NPO 法人シャンティ山口事務局長・理事佐伯昭夫氏より詳細なコメントをいただきました。ここに深くお礼申し上げます。なお、本報告書のありうるべき誤りなどは、全て筆者に帰せられるものである。

う時間が十分に確保されていないのではないかと考えた。しかし、シャンティ寮の卒業生はタイでも難関大学といわれている。大学に合格し、奨学金を得て進学する生徒も存在するという事実を知った。彼らはどのように寮生活を行いながら、同時に学習と向き合い生活しているのだろうか。

寮の一日は、朝は5時には起床し、洗濯や水浴びを行う。食事当番は食事を作り、7時には朝食を食べ学校に向かう。私たち日本人学生滞在期間は週末を挟んでおり学校は無く、寮生たちと彼らが通常行っている農業の手伝いをしただけではなく、共に都市へ出かけたり、文化交流を行ったりした。



【寮の炊事風景】



【田植え体験風景】

寮生と共にチェンセンにあるアヘン博物館やラオス、タイ、ミャンマーの国境が見渡せるゴールドトライアングルなどを訪問した。日ごろ農業や勉強で多忙な彼らも年に一度の校外学習、この日ばかりは自分なりのお洒落をしてカメラを片手に楽しんでた。文化交流では、女子は庭で刺繍体験を男子はケーンと呼ばれる竹でできた管楽器を体験した。寮生は刺繍を巾着や洋服に施したものを商品として販売することもあるそうだ。ケーンという楽器は、モン族に伝わる笙の一種で、お葬式などの儀式の際、主に男性が演奏する楽器として知られているという。

最終日の夜には日本の学生とタイの生徒が、お互いの文化を紹介する交流会を行った。タイに昔から伝わる伝統舞踊を発表しただけでなく、現代風の演奏にあわせて一緒にステップを踏むダンスも一緒に踊った。私たちはもともとタイ語が全くできなかったが、寮生たちは大変気さくで、少ない時間であったが交流会を通してお互いの絆を深め合うことが出来た。言葉さえなくてもお互いの文化に触れ、笑い、感情豊かに接することで、つながることが出来るということも実感することが出来た。

今回の滞在で感じたことは、限りある時間の中で、生徒たちは勉強だけでなく、生活するために必要な農作業や家事も同じように一生懸命に取り組んでいるということであった。勉強する時間が十分とは言えない環境で優秀な人材が輩出されているという所に、全ての物事に全力で取り組む彼らの努力や根気を見ることが出来た。寮に休暇で訪れていた東京新聞・中日新聞 バンコク市局長の杉谷剛氏によると『一年の半分をモン族の村で過ごす佐伯さんは「寮では炊事、洗濯、農作業と雑用が多く、勉強時間は少ない。それでも勉強が出来る喜びと「タイ人に負けたくない」という民族の誇りが成績を向上させている」とみる。』とのことである。<sup>2</sup>村から離れ、寮に身をおく中で民族としての誇りを持ち、勉強や生活に必要な仕事をも全力でこなす彼らの姿は私たち日本の学生も学ぶべき点が多くあると考える。



【民族衣装を着た寮生たち】

<sup>2</sup>杉谷剛記者新聞記事 [http://file.kenkenbicycle.blog.shinobi.jp/20120917\\_3.JPG](http://file.kenkenbicycle.blog.shinobi.jp/20120917_3.JPG) (2013/09/17)

## 第2章 大学は地方都市の支柱として成り立つのか

国際文化学科 2年 芳田 藍里

私たちが訪問したチェンライ・ラチャパット大学（以下、チェンライ大学）は、タイ北部の都市チェンライに立地している、タイの中でも少数民族の学生数が多い大学である。

大学という教育機関が、どのようにチェンライの街を支えているのだろうか。チェンライ大学は、チェンライの街を支える支柱の一つと称されているらしく、大学の敷地は広大で、木々や湖などの豊かな自然に囲まれており、勉学に励むのに適した環境だ。また、大学構内を学生用の小型バスが走っている光景は、広大な敷地ならではのものだ。

私たちが最初に視察したチェンライ大学伝統医学部は、国内で最初に伝統医学部を設立し、WHOとも連携をしている研究機関でもある。同学部では、各少数民族に伝わる伝統医学の考えに基づいた治療法を体系化していた。人間の健康には、水や風などの自然の要素が影響を与えていて、人間はカルマの中で生きているという伝統医学の考え方は、先進医療に慣れている現代の日本人にとっては、新鮮なものであった。中国における漢方のように、植物そのものを薬として利用しており、これは何百年も前に中国から渡ってきた少数民族に継承されてきた伝統医学である。伝統医学部の敷地の中には、植物園を思わせるような樹木や草花の群生が見られ、一つ一つの植物の効能について細かく分類がなされていた。視察中に出会った学生は、どの学生も熱心に実習や研究に取り組んでいた。その中でも、特に注目したのは、自ら医薬品を作っている学生の姿だった。粉末を一つ一つ丁寧にカプセルに詰めていく姿は、さながら製薬会社の研究員のものであった。これらの学生達こそがチェンライの街を支えていくのだろう。

学生たちは「一人でも多くの患者を助けたい」という強い使命感を持って、医薬品を作っているのだろう。タイは都市部と農村部の差がまだまだ激しい国であるが、農村地帯に囲まれた北部の都市であるこのチェンライにおいて、チェンライ大学のように発達した研究機関があることは、地方都市やその周辺地帯が豊かになるためには欠かせないことである。また、チェンライ大学で学んだ学生たちが、チェンライ県内の企業に就職したり、自ら起業したりすることで、さらなる経済発展が期待できる。研究機関だけでなく、若い世代を育成する教育機関でもある大学は、地方都市を支える大きな支柱として、十分にその能力を発揮していると思われる。

日本国内においても都市部と農村部の差はあるが、教育の機会という点においてはタイ国内ほどの差は見られない。タイ人学生からは、自らが主体となって生まれ育った町を発展させたい、支えていきたいという強い意志が感じられた。彼らの意欲的な姿勢は、日本人学生も見習えるものであった。

私は、彼らのような学生が将来、日本への留学を経験するなど他大学との継続的な交流を行うことによってタイ国内の医療技術の底上げができるのではないかと考えた。日本の医療技術は世界でもトップレベルに属しているため、日本の医療技術から学ぶことは充分にあると考えられる。そのうえ、日本と東南アジアの中心国であるタイの大学生が交流を深めていくことによって、今後の東南アジアの関係性にも好影響が望めると考える。

チェンライ大学の学生と交流を深めるため、午後からチェンライ大学人文学部英語学科の学生に向けて、日本についてのプレゼンテーションを行った。日本についてのプレゼンテーションを行ったのは、徳島大学の学生3名と私たち8名で、その他に徳島大学大学院留学生のモンゴル人二人がモンゴルについてのプレゼンテーションを行った。最初にチェンライ大学の学生が、私たちに向けて、チェンライに

ついて紹介するプレゼンテーションを行った。舞台の上には登壇者用の机と椅子、パソコンが用意されていて、プレゼンテーションソフトを用いてスクリーンに写真や文字を映し出していた。

発表者は、それぞれ自分が事前に考えた日本文化に関するテーマに基づき、写真やフリップなどを用いて、発表した。例えば、タイに浸透している日本企業や寿司、神楽笛、空手道についてのプレゼンテーションであった。タイでは、たくさんの日本の自動車企業の車が走っていて、原動機付き自転車の保有率も高い。そのせいか、「TOYOTA」や「ISUZU」などの日本企業は、タイ人学生に広く知られていた。また、タイのデパートや屋台には、寿司を真似た商品が並べられていることがよくあり、商品名も「SUSHI」として販売されているため、寿司も同じように広く知られていた。プレゼンテーションの後には、日本人学生とタイ人学生を混ぜた少人数のグループをいくつか作り、発表に基づいて文化の相違点について話し合った。日本人学生もタイ人学生も、あまり英語が得意ではない学生が多かったが、お互いに分かりやすい英語を用いて、意志疎通を図った。タイ人学生の話を見ると、日本のアニメーション作品がタイでも放送されているらしく、特に人気なのは、忍者を志す少年を描いた「NARUTO」という作品だと教えてくれた。また、日本企業の「AJI NOMOTO」が販売している商品「味の素」も、タイでは定番の調味料として人々に親しまれているとも教えてくれた。実際にタイでは日本文化はどのように受け入れられているか。タイの学生にとって日本文化は、特別な意識を持たずとも自然と生活の中に定着しているようだった。また日本企業の自動車や原動機付き自転車などは、もはや生活に無くてはならないものとなっている。寿司やアニメーションなどは、主に若い世代に最も人気があり、今後も需要は高まりそうである。このように文化が相互に理解を深め合うきっかけとなった。

今回のチェンライ大学訪問において、自国の文化を他国民と共有することの素晴らしさを実感した。自国の文化を他国民と共有することで、普段、日本で生活していると意識が薄れてしまいがちな日本の良さを再発見でき、また共通の文化を好む者同士で分かり合えると思うからである。日本とタイの異文化交流を通し今後も交流が発展するのではないかと考えられる。



【伝統医学部にて、薬を作る学生】



【プレゼンテーションをする日本人学生】

### 第3章 ホイプム村保育園の現状と課題

国際文化学科 4年 町浦 朱帆

タイには多くの少数民族が住んでいる。貧しい暮らしを強いられている人々も少なくない。そのような中、村に保育園ができるということは子どもたちだけではなく、村全体の人々にとって喜ばしいことなのである。ホイプム村は、プラチャーパクディー村から南東に 25 km のラオス国境沿いに位置し、世帯数約 60 軒、人口約 300 人の村である。主要道路から離れ山道の悪路で雨期には車の通行ができず、資材など荷物の運搬は、この期を外し乾期に集中して行っている。農作物の出荷には、収穫時期を調整し、種まきなどを行うなど生活も不安定である。

保育園は、6 年前にバンコクのマヒドン大学の学生ボランティアが寄付を募り、休暇を利用して村人と一緒に建設した、壁もなく雨をしのぐためだけの粗末な狭い小さな設備であった。園児は 40 人、正式な保育士がいないため、村で知識のある年輩の女性 2 名が従事していた。衛生面や給食などでもまともな保育ができない粗末で劣悪な状況であった。そこで、シャンティ山口の協力のもと保育園が増設整備されることとなった<sup>3</sup>。

8 月 26 日の午前中、ホイプム村に到着した。村に着いてすぐ村の子どもたちが通っているこの保育園を訪問した。保育園の子どもたちはちょうどお昼ご飯を食べ終えたところのようであった。これからお昼寝の時間ということで私たちはいったん引き返し、子どもたちがお昼寝から起きるのを待った。2 時間後、保育園に戻り交流会を行った。はじめに、私たちはおりがみで紙飛行機を作り遊ぶことにした。作り方を見せながら一緒に作ろうとしたものの折れる子はほとんどいなかった。私たちが完成した紙飛行機を飛ばしてみせると、真似をして楽しそうに飛ばしていた。紙飛行機で遊んだ後、次にシャボン玉で遊んだ。私たちが、シャボン玉を飛ばすとそこへ皆集まってきて楽しそうにシャボン玉を割っていた。

子どもたちが楽しそうに遊んでいる様子を見て良い交流会になったものの、この交流会は何かがおかしいと感じた。ほとんどの子どもが笑っている中、何人かの子どもは隅のほうに隠れていた。私たちが声をかけても出てこようとはしなかった。そのような時、たいていの保育士は隅にいる子どもに「みんなと一緒に遊びましょう。」と声をかけるはずである。しかし、ホイプム村の保育士は、ただ外から私たちの交流会の様子を見ているだけで参加交流を促す様子は、見られなかった。シャンティ山口の佐伯昭夫氏によると、同団体の支援の後政府から派遣されることになった有資格保育士はタイ人で、タイ国内の中でも極めて困難な暮らしをしている山岳少数民族のモン族を差別しているからであるということがわかった。ホイプム村の保育士たちは、自らが勤務地を選択しこの村に来ているわけではない。町から離れたこの村で働くことをあまりよく思っていないため必要最低限の仕事しかしないのである。

この現状からタイ山岳少数民族に対する差別はまだ根強く残っていることがわかった。タイには北部や北西部を中心に、伝統的な習慣や文化を守る大勢の山岳民族が暮らしている。ひと言で「山岳民族」といっても、カレン族、アカ族、モン族、ラフ族、リス族など約 11 部族に分かれており、それぞれに話す言葉や習慣、生活様式などに大きな違いがある。このようなタイ山岳民族は、長期にわたり、平地に住むタイ人との文化や習慣の違いなどから強い差別や偏見にさらされてきた。実際、山岳民族の約 4 割が「暫定的な滞在者」として正式なタイ国籍を認められてないのが現状である。そのため、人々は正規の高等教育や医療サービスを受けることができないばかりか、就職の制限、他県や他市への移動も禁止

<sup>3</sup> 特定非営利活動法人シャンティ山口 <http://www.shanti-yamaguchi.com/> (201312/01 閲覧)

されているなど厳しい制約が課せられていることもある<sup>4</sup>。

では、この差別をなくすためにはどうすればよいのであろうか。その解決方法として3つ挙げられる。第1に、モン族の中から優秀な人材を育成し、モン出身の保育士を育てるということである。そうすることによりモン族に対する差別はなくなるはずである。自分たちでモン族の自立した地域をつくることができる。誰からも差別されることなく幸せな暮らしができるかもしれない。しかし、この方法には問題が生じてしまう。モン出身の保育士を育てることにより、確かに差別はなくなるであろうが、モン族の孤立につながってしまうと思われる。モン族以外の人々と交流することがなくなり、社会から離れていくことになるのではないだろうか。第2に、僻地へ赴任する保育士には手当をつけることである。そうすればタイ人の保育士たちの不満は減るはずである。しかし、根本的な問題である差別問題が解消されていないことになる。第3に、差別をしない教育を保育士に行うことである。そのためには、タイ人の保育士の意識変化が大切である。差別をしない保育士の姿勢をみた村の人々からは信頼を得ることができ、もしも困った時は助けてもらえるようになるだろう。一人ひとりの意識変化が差別をなくすことに繋がるのである。ホイプム村の保育園への支援活動は、モン族の自立への一歩であるといえる。この差別問題が解消されればより良い地域をつくることのできるのではないだろうか。



【保育園児との交流】



【紙ひこうき 遊び】

## 第4章 モン族の伝統継承と繋がり

国際文化学科 2年 俵屋 理奈

今回フィールドワークを行った地域に住んでいるモン族とは、現在、東南アジアのラオス、ベトナム、タイ、そして、中国南部などの山岳地帯に住む山岳少数民族である。私たちはそのモン族の住むホイプム村に3泊4日でホームステイを体験した。ホームステイをする上で2つの疑問が浮かんだ。第1に、モン族同士の地域交流はどのように行われているのか、第2に、他民族（モン族と私たち）とのコミュニケーションは成り立つのか、というものである。ホームステイを通じて、モン族は多くの小さな繋がりを持ち、その一つ一つの繋がりはとても太いものであり、異文化を持つ私たちにもたくさんの経験と

<sup>4</sup> 上野敏子『希望の家を支える会』<http://www.sunnyside.jp/kibounoie/sangaku/> (2013/9/21 閲覧)

ともに様々な繋がりを感じさせてくれた。

まず、モン族同士の繋がりにはどのようなことが行われているのだろうか。村の中心には集会所のようなものがあり、そこでは村の住民たちがよく集まって話をしている。また日中は女の人たちが集い、モン族伝統の民族衣装作りの刺繍をしている。その中には10代から40代などさまざまな世代の人がおり、年配の女性たちは、農業と両立させて、伝統刺繍を活かした小物を作り、それを市場に出して生計を立てている人が多い。小さな子どもがいる家庭がたくさんあり、畑と一緒に連れて行く家庭もあれば、子どもたちが近所の一つの家で自然と集まり、おばあさんたちがまとめて面倒をみたりする家庭など様々あり、子どもたちが村人たちの交流のきっかけにもなっていた。しかし村には学校がないために、小学生になると子どもたちは勉強するために家を出て、親戚に預けられたり寮に住んだりして学校に通う。そのため、村には小学生以上の子どもがいなかった。中には休みの日には村に帰ってくる子どももいるという。その反面、高校生ぐらいの子どもたちは学校に行かず、家の家事や手伝いをしている子も見られた。現在では村の若い人たちが帰ってきたことにより、47世帯だった村も今では62世帯まで増えたのである。シャンティ山口の佐伯氏によると、これは村の将来が見えてきたことにより多くの人が村の再生のために何かしようとしているからだと話していた。

では、他民族との繋がりにはどのようにして作られているのだろうか。村の人たちはほとんど文字を持たないモン語を使って会話をしている。そのためモン語を知らない私たちは、簡単なモン語とジェスチャーがコミュニケーションの手段であったが、文化が違くとそれらで伝えることは簡単ではなかった。しかし時間が経つにつれ、お互いジェスチャーで心を通わせることができるようになった。村での交流会ではホストファミリーだけでなく村の人々が大勢集まった。交流会は、餅つきから始まり、お互いの出し物を行った。餅をつく際、木で作った杵と臼を使用していた。ただし、日本のように横で餅をこねる人はおらず、2人で杵をつき、ついた餅は、固ゆでした卵の黄身を手につけ、抗菌作用のあるバナナの葉に包み、それを少しづつちぎりながら、練乳につけて食べた。同じ「もち」という食文化でも日本の文化とは大きく異なるものだった。餅つき大会の後は、ホストファミリーのお母さんたちが用意してくれた料理を食べた。鶏をさばいたりするところや、様々な食材が並んでいるのを見ることができた。夕食後、異文化交流をし、私たちはそれぞれの家庭で作られたモン族の伝統衣装を着ることができ、肌で異文化を感じることができた。このような交流会などを通して、他民族はもちろん、村の人たち同士も繋がりを強めるきっかけになっているのではないだろうか。

ホイプム村での生活を通し、昔の日本の姿を見ているようだった。電気がない生活や火をおこしての食事作りなど、今の日本では考えられないような生活様式だった。衛生的に考えるとあまり良いと言える場ではなかったが、佐伯氏のように他国からの援助を得て、より良い生活へと改善していくきっかけにし、今後自分たちだけでも生活していけるようになる必要があるだろう。小さな村だからこそ人間関係は深く強く繋がっていて、故郷への愛情も深いものだと感じたことから、きっと自立へ向けて村人たちが同じ目標に向かって力を合わせて進んでいくことができるだろう。現在の日本の都会などでは近所付き合いが失われ、人との繋がりも薄れつつあることから、小さな村から学ぶべきところもあるようだ。ホイプム村での生活が今までの自分の生活を見直すきっかけになり、異文化を体験することの大切さを感じた。自分の生まれ育った町を大切に思い、伝統を守り、継承していくモン族を見て、日本でもその心を忘れてはならないと感じていた気持ちがより一層強くなった。将来、自分の関わってきた街を大切に人々を増やし、街の伝統文化を次世代につなげられるような活動を私はしていきたい。伝統文化を

継承していく中で、次世代の新しい観点を盛り込むことでより一層活気づき、新鮮な気持ちで伝統文化を考えていくことができるだろう。



【モン族伝統のお餅つき】



【家族といっしょの食事会】

## 第5章 自国の文化を伝え合う

国際文化学科 4年 梶野 真央

私たちは8月25日のシャンティ寮での交流会および28日のホイプム村での交流会でお互いの文化を体験した。シャンティ寮の生徒たちは綺麗に化粧をし、皆タイの伝統的な衣装を着てタイ舞踊や、伝統的な楽器を使った踊りを披露した。私たちは一緒に参加していた徳島大学の学生と共に法被を着て日本三大盆踊りの1つである阿波踊りを踊り、タイの子どもたちには浴衣を着てもらい、一緒に阿波踊りを踊った。また、日本の学生が神楽笛を披露した。タイでの異文化交流を通して私たちが日本の文化に対して曖昧であることを実感した。異文化交流をするには自分の国の文化をきちんと知ることがとても大事になる。本章では今回のフィールドワークでの異文化交流の経験から自国の文化を知り、伝え合うことの大切さを述べる。

私たちはシャンティ寮の子どもたちやホイプム村の人々から踊りを通してタイの少数民族文化を教わった。自国の文化を伝えるときに踊りを踊ることはポピュラーで分かりやすい。しかし私たちは自国の文化に対する知識もそれを体験する機会もこれまでにほとんどなかったため、日本の文化をきちんと表現し、伝えることができなかった。事前準備の段階で私たちには何ができて何をみせることができるのか悩んだ。日本の文化の何を選んでタイで発表すればよいのか、その選択肢がとても少なかった。日本の文化を伝えたくてもできない悔しさを経験したことで、将来これからの日本の文化の素晴らしさを再確認し、皆が日本の文化に自信を持って様々な場で伝えることができるようにならなければいけない。一方でシャンティ寮の子どもたちは伝統的な踊りを踊ることができたし、ホイプム村ではそれぞれの家に伝統的な衣装を持っていた。モン族の人々は貧しい生活をしながらも文化を誇りに思っていて、民族衣装を日本に持って帰りなさいと、1着持たせてくれた。

我々の文化を相手に伝える際に、踊りを踊ることは1つの手段でもある。その国の特徴や民族性をそこから読み取ることができる。日本の伝統的な文化を経験できるプログラムを取り入れている学校があ



るかを調べたところ、東京都の学校では「伝統文化」という科目の授業があることが分かった。ここでは国際社会に生きる日本人としての自覚と誇りを養うとともに、多様な文化を尊重できる態度や資質をはぐくむ教育を推進している。これは自国の伝統や文化を世界に発信できる資質や能力をもった子ども、他国の伝統や文化を理解し尊重し、互いに文化交流ができる子ども像を目指している<sup>5</sup>。ここで大切なのはただ聞くだけ、日本の文化的な歴史を覚えるだけではなく、体験をすることにある。例えば東京都のある中学校では外部講師を呼んで生徒が三味線を弾く授業や、高校では茶道を授業の中に取り入れている学校もある。東京都だけでなく、山口県の学校にも小学生の時に茶道を習ったり、ソーラン節を踊ったりと日本の伝統的な文化を体験し、学ぶ機会があった。が、一時的にそれを体験してもなかなか身に付かない。小学生で習ったものをそこで終わりにするのではなく、文化継承のためにもそのまま中学、高校、大学と繋がるようなプログラムが必要ではないだろうか。多くの国において伝統文化から現代文化まで、幅広い分野の文化が国際交流の対象となる。日本の伝統と文化を訴えることは、国際的理解の促進に成果をあげる<sup>6</sup>。

今回のテーマである自立のためには生活が豊かになり自分達の力で生活できるようになることなどが必要であるが、文化という面での自立もある。異文化交流はその中の大事な要素のひとつである。少数民族の住む地域も地域独自の道を歩みながら発展することは可能である。日本にもいえることだが伝統を無視して国や村が発展することはできないのだ<sup>7</sup>。

異なる文化や背景を持つ人々を排除するのではなく、地域の中で共生していかなければならない<sup>8</sup>。発展途上の国、村では閉ざされていた空間から徐々に外の世界のいろいろなものと関わりを持つようになる。今持っている文化を伝え合うことは他国との関係や文化、考え方を理解することにもつながる。様々な文化を持つ民族同士が理解し合えば差別や偏見も少なくなっていくのではないだろうか。日本も豊かになっているとはいえ、ホイプム村と同様にただ生活が豊かになることが自立につながるのではなく、文化の継承や表現することの文化的な自立の大切さも今回のフィールドワークを通じて学んだ。

これからの異文化交流は自立への第一歩として、異文化交流を通じてありのままを伝え、互いの違いを認め合うこと、またそのためにも私たちが自国の文化を知っておかなければならないことを痛感した。目に見えない異文化交流というものが人、国の自立として重要であることを知った。

---

<sup>5</sup> 東京都教育委員会 [http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/dentou\\_top.htm](http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/dentou_top.htm) (2013/12/04 閲覧)

<sup>6</sup> 第2章国際文化交流の現状と課題

<http://www.bunka.go.jp/1kokusai/kokusaikondankai2.html>(2014/01/17 閲覧)

<sup>7</sup> グローバリズムと多民族・多文化社会—中国の現実、世界の課題—

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/IReC/pdf/200903china.pdf#search='%E5%A4%9A%E6%B0%91%E6%97%8F%E3%81%AE%E8%82%B2%E6%88%90+%E6%96%87%E5%8C%96'>(2014/ 01/17)

<sup>8</sup> 鶴見ほっこり村、概要

<http://hokkorimura.jimdo.com/app/download/6330602158/%E9%B6%B4%E8%A6%8B%E3%81%BB%E3%81%A3%E3%81%93%E3%82%8A%E6%9D%91+%E6%A6%82%E8%A6%81%EF%BC%88%E2%96%A0%EF%BC%89.pdf?t=1341069045>(2014/01/08 閲覧)



【民族衣装を着せてもらった】



【モン族の料理】

## 第6章 エコトイレから見る自立への道

国際文化学科 2年 岡山悦子

私たちが生活するうえで最も重要なのは、「衣食住」である。衣服を着て暑さ寒さをしのぎ、身を守ること。食事をして体力をつけること。そして、住居で雨風をしのぎ安心して寝る場所を作ること。これらの3つは私たちの生活の基礎であり、これらがそろっていなければ生活することがたちまち困難になる。「衣食住」と一口に言っても、国や文化が違えばそれだけの数の「衣食住」の形が存在するはずである。ここでは「衣食住」の「住」、つまり住環境について述べる。

住環境は国によって全く異なっていると言いたいところだが、実際タイの都市に宿泊してみると、日本とそこまでの大差はなかった。しかし、匂いや食べ物や道路などは日本と多少違っており、特に、トイレは明らかに異なっている。タイではトイレトーパーを使う習慣がない。また、一応水洗トイレではあるが、自分で水を汲んで流さなければならない。さらに、町にあるトイレではお金を払わなければならない所が多い。トイレが有料である理由として、トイレの維持費や清掃員の人件費となることが挙げられる<sup>9</sup>。衛生的なトイレを作るために、トイレの使用を有料にするのは1つの策だと言える。

しかし、タイの町以外ではトイレは問題となっている。山岳地帯のホイプム村でもトイレの問題は起こっていたとのことである。モン族は近くの畑などで排泄していた。糞尿はそのままの状態では放置されていた。すると子どもたちがそれを見つけ、遊んでいた。中には、その糞を口にすることもあった。そのため病気が発生していた。

そこで、シャンティ山口が行っている事業の一つとして、上下水道が整っていない地域へ「エコトイレ」を設置することに取り組んだ。この「エコトイレ」は、一般的なトイレとは違う工夫がなされている。集落ができるとトイレは必ず必要になってくる。しかし、エコトイレが設置される以前のホイプム村にはトイレは存在しなかった。それを見た佐伯氏は、日本の肥溜めをヒントにエコトイレの開発を考えた。このエコトイレは、シャンティ山口が独自に開発したものである。エコトイレの処理装置の順序

<sup>9</sup> livedoorNEWS [http://news.livedoor.com/article/detail/4702824/\(2013/10/9閲覧\)](http://news.livedoor.com/article/detail/4702824/(2013/10/9%20閲覧))

としては、5段階に分けて処理されている。まず、第1槽で糞尿を嫌気処理し、発生したメタンガスを貯蓄する。このメタンガスは保育園での調理に使われている。第2槽から第5槽まででさらに嫌気処理で分離し、微生物によって分解され、そしてそれは肥料として利用される。水は窒素やリンを含んだ養分の高いものとなり、畑で再利用される。糞尿が肥料やメタンガスに変身し、最終的には飲み水にできるほどの真水になって、自然循環型のエコトイレが出来上がっている<sup>10</sup>。

現在ホイム村には62世帯の人々が暮らしている。この62世帯のすべての家にエコトイレの設置が完了している。エコトイレの処理装置と肥料については、各家庭にトイレ・処理装置・畑と一連のシステムになっていて、戸別のトイレのそばに処理用の畑があり自然に野菜などの肥料になっている。また、事前にホイム村すべてにエコトイレの設置が完了したとき、ガスが通って住民が喜んでいる映像を見て、ガスは各家庭についているものだと思っていた。しかし、実際はそうではなく、ホームステイ先の家では火を起すところからはじめていた。これについては、ガスの装置は、鉄製のタンクなど少し費用がかかるため3世帯以上の集合を原則としており、発生したガスの消費の分配など利害関係を生じるため、3世帯以上で共同管理ができる世帯と保育所を含めて4カ所のみを設置されていた。ガスの設置には条件が必要だが、これは本当にエコトイレの有効活用になっているのだろうか。エコトイレの設置によって病気はなくなり、衛生的にも改善されてきた。金銭面での問題が解消され、各家庭にガスが設置できるようになれば、より便利な生活になるのではないかと考える。エコトイレに秘められた力はまだまだあるように感じる。

エコトイレの設置にあたり、シャンティ山口が自ら設置し、住民へエコトイレを提供するのではなく、村人自身が設置に携わるようにしたとのことである。自ら設置したことにより、トラブルが発生した時には自分たちで解決することが可能である。村人はエコトイレをきれいに使用しており、愛着が湧いていたように思われた。

かつてホイム村ではトイレがないことが原因で病気が流行していた。シャンティ山口が開発したエコトイレの設置により、衛生面は改善された。一方で、全世界で適切な衛生施設を利用できない人々は約25億人に上り、屋外で排泄する人々も10億人を超えている<sup>11</sup>。このような状態では衛生的にも良いとは言えず、病気が流行してしまう。

私は将来、発展途上国の支援に携わることができる職に就きたいと考えている。今回のスタディツアーで、実際にどのような支援を行っているのかを目の当たりにし、支援の形に深く興味を持った。多額の投資を受けて、業者が不衛生な地域にトイレを作って、それで終わりという支援の形をとることもできる。しかし、シャンティ山口はそのような支援ではなく、最後まで村の人に寄り添った支援を行っているように感じた。その後を考えたうえでの支援である。どのように支援し、人々とかかわっていくべきなのか支援のあり方を考え直さなければならない。一方的な支援ではなく、その土地の人々に寄り添い、協力することで本当の支援ができるのではないだろうか。そして、寄り添い続けるのではなく、ホイム村の人々が支援から自立できるような支援の仕組みも考えていかなければならない。

---

<sup>10</sup> シャンティ山口 <http://www.shanti-yamaguchi.com/index.html> (2013/9/20 閲覧)

<sup>11</sup> 国際連合広報センター [http://www.unic.or.jp/news\\_press/messages\\_speeches/sg/5549/](http://www.unic.or.jp/news_press/messages_speeches/sg/5549/) (2013/11/30 閲覧)



【エコトイレのガス装置】



【台所のガス燃焼状況】

## 第7章 遺伝子組み換えトウモロコシは本当に幸せの種だったのか

国際文化学科 2年 上島 千明

ホイプム村に入る細い一本道。もちろん舗装されていない。車に揺られること一時間、私達の目の前にはトウモロコシ畑と、荒れ果てた山や畑があった。なぜ、こんなにも山や畑は緑を失い、新たな植物は育たなくなってしまうのだろうか。ホイプム村の人々は遺伝子組み換えトウモロコシで本当に幸せになれると思い、それが継続される未来であったのか考えていたのであろうか。

私達はタイに行く一ヶ月前に事前学習で佐伯氏のこれまでの村での事業内容、これからの目標などをビデオなどで見ながら学んだ。ビデオには、欧米の生物化学メーカー「A社」が開発した遺伝子組み換えトウモロコシがたくさん映っていた。A社はアジアに展開するバイオテクノロジー開発会社であり、ベトナム戦争で枯葉剤を製作した会社でもあると言われている。なぜ、こんな山奥でこんなにも栽培されているのであろうか。近年、人口増加で人々が食事の際に摂取する肉の量が多く必要となった背景がある。そのため、現金収入が容易に見込め、家畜の餌として安くて大量に出来る遺伝子組み換えトウモロコシが広まった。A社は貧困をなくすという理由でタイの山間地域に進出した。A社の遺伝子組み換えトウモロコシのメリットは作物が大きくて質もいい。また、病気に強く手入れが必要ない。村の人々はその夢のようなトウモロコシを借金してまで買った。実際に植えてみると、その被害は植物だけでなく人々の人体にまで影響した。枯葉剤の入った肥料を使用するため雑草は生えない。土地の荒廃などの環境破壊が起こる問題も存在する。タイでは突然バケツをひっくりかえしたようなスコールと呼ばれる雨が降るが、雑草がないため一気に土が流れる。そのため、トウモロコシを収穫した後にまたその地に作物を植えることが出来なくなる。人々は違法で森林伐採を行い、また遺伝子組み換えトウモロコシを植えることを継続していった。村での人体被害の報告もあった。皮膚に異常が出たり、枯葉剤の入った川の水を使用し目や体の内部に異常が発生したりする人も出た。因果関係の確証はないが、遺伝子組み換えトウモロコシ栽培を開始以来の症状であるようだ。

フランス人研究者の論文により「除草剤耐性トウモロコシ NK603 を2年間にわたってラットに与えたところ、乳がんや脳下垂体異常、肝障害などになった」とのことである。その栽培する国の気候、土

壤状態、貯蔵方法等によって細菌は変化することから遺伝子組み換えの研究は難航するものの、このような状況にホイプム村も現実になりつつあった。この状況を変えようとシャンティ山口が複合農業を推進した。遺伝子組み換えトウモロコシの代わりとなる地域で消費可能な作物を栽培し、可能であれば海外へ輸出するといった仕組みを提案し、実践している。水田以外の地でも作れ、日本でも採用されている米、マンゴーやパイナップル、タイで年々需要が増えているコーヒー豆の栽培に切り替えた。トウモロコシを収穫した後の土地に自分たちの手で時間をかけて新たな米や果物を植える「取り木手法」で行っていった。また、村の人々は害虫にはどのような種類があるか、衛生面、どのような作物が適しているのかなどを学んだ。佐伯氏は知識以外にも学んでほしいことがあるという。それは、働くことの喜び、学ぶことの楽しさである。出荷までには約4年から7年かかる。しかし、持続可能な農業にするためには知識を得て、村の住民の気持ち次第で変わってくる。村の土壤に適し、かつ収入の見込める作物を育てる家庭が増えることで、現状は徐々に変化し、村の自立につながる。佐伯氏はタイ政府の依頼を受け、この事業を今現在も行っている。遺伝子組み換えトウモロコシは、土地を荒し、住民たちの身体を蝕み、幸せの種とはならなかったという結果であった。

佐伯氏のような国際協力を行っている人はどのような思いで行っているのか、大切にしていることはなにか。佐伯氏はある言葉を何回も繰り返していた。「自分たちの手で切り開けるように互いに頑張る。一方的な支援ではなく、そのようなボランティアは辞めてほしい」。佐伯氏の事業は期間が決まっており、全部やってあげるわけではない。一つ見本となるものを村の住民たちと作成する。その後は村の住民たちの手で増設や、新たな担い手に伝えていく。全部の村の問題を解決してあげてしまえば意味がなく、そのため、見本を見せるそうだ。専門知識も必要となってくるが、その専門家のみで事業を行って、文化を一方的に押し付けてしまっても意味がない。また、事業が終わるとアフターケアを行っていない、その後連絡を取っていないことも起きてしまう。佐伯氏は住民たちやスタッフとの連絡やコミュニケーションをととても大切にしていた。一人一人の話や家庭の変化や状況を把握していた。それゆえ、住民やスタッフが佐伯さんを信頼し、私達のような日本人学生のホームステイを受け入れてくれたのだろう。さらに、タイ政府も支援を行わないといけな。佐伯氏は日本政府などから得た助成金や資金のほぼ全部を事業に回している。事業に回る資金より、NPO 職員の制服や、給料に回るのはおかしいことだと述べていた。真の国際協力とはこのようなことだ。それまで日本では遺伝子組み換え食品で異常が起こったニュースに関心がなかった。私達は普段の生活で遺伝子組み換え食品に対し関心を持つべきである。



【一面のトウモロコシ畑】



【村の幸せを願いつつのお別れ】

## 第8章 村に落ちているゴミは無くなるのだろうか

国際文化学科 4年 廣實 大樹

ホイプム村の環境調査の一環としてゴミ調査を行った。私が2011年に同スタディツアーに参加した時の事前学習で佐伯氏から「ホイプム村には日本のように細かく分別されておらず、道などに捨てることが自由であり、そのうえそれらを拾う文化もない」という助言を受けた。今回も同様の調査をおこなった。ゴミ調査を行った理由は、第1にホイプム村でのゴミ処理方法の実態を知ることである。第2に、2011年のスタディツアーで行われたゴミ調査後、村に変化があったのかを検証することである。第3に、この調査は村に還元されるように行うことである。

ゴミ調査は、8月28日14時～15時の約1時間行った。調査範囲は、ホイプム村のメインとなる道を中心とした。調査方法は、村を歩いて回りながら、燃えるごみ、燃えないごみ、ペットボトル、缶、およびビンの5種類に分別しながら拾った。調査者は、スタディツアーに参加した徳島大学および山口県立大学の学生13人、引率教員1名、シャンティ山口現地スタッフ4名そしてホイプム村の子ども達が参加した。

調査結果は次の3点である。第1に、集めたゴミの内訳は、燃えるごみ約4キロ、燃えないごみ約6キロ、ペットボトル20本、缶8本、およびビン14本であった。前回の調査では、ホイプム村全域を調査範囲として行ったので、村に落ちていたゴミをほぼ全て拾った。しかし、今回の範囲は村の中でも大きな道であったにも関わらず、前回の調査に相当するくらいの量があった。第2に、前回の調査同様、食品やお菓子のビニールゴミが多かった。ビンのゴミの中では、ビール瓶が目立った。これは、村が豊かになった表れであろうか。一方、日本とは異なり、生ゴミは全く無かった。その理由としては、モン族の食事は、必要最低限の量しか作らない。それでも余った場合や調理時に発生した生ゴミは、動物や家畜のえさにしているため、生ゴミは発生しない。第3に、前回の調査後、ゴミに対する住民の意識の変化は無かったと判断できる。その原因の1つに、前回の調査後に、その後の取り組みについて提示できずに、調査が一過性のものになってしまったことも挙げられる。

シャンティ山口現地職員2名とともに私が実施したホイプム村全世帯(62世帯)を対象にアンケート調査によると、家庭で発生したゴミの処理方法を尋ねる設問では次のような結果が得られている。<sup>12</sup>62世帯中約44%の27世帯がゴミを「焼く」と回答していた。一方で、約42%の26世帯がゴミを捨てる場所として家、道や川の周りとは回答していた。この結果より、ホイプム村ではゴミの処理方法の1つとして家、道や川の周りにゴミを捨てることが確立していることが分かった。また、「焼く」ことで燃えるゴミが処理されることで、燃えるゴミよりも燃えないゴミの量が多かったことも理解できる。村に落ちているゴミ全てがアンケートで、家、道や川に捨てるかと回答した26世帯の責任だとは考えにくい。村滞在中にゴミを捨てる瞬間を何度も目にした。その中には、26世帯以外の人たちも無意識のうちにも捨てている可能性も十分考えられる。

今後の課題として、5つ挙げられる。第1に、燃えるゴミは、家庭での焼却処分を勧めることである。ただし、タイの気候上、乾燥している時期が多いので、火の取り扱い方の知識をきちんと伝達する必要がある。村の家屋は木造で、焼却処分中に火が燃え移ると、住宅火災および森林火災に繋がる可能性は十分にあるからである。第2に、ホイプム村住民へのごみに対する意識について調査を行うことである。

<sup>12</sup>廣實大樹(2013)『卒業論文 タイ・ホイプム村のごみの現状と対策』

住民が、私たちが行ったゴミ拾いをどのように感じていたのか、何か心の変化があったのかの聞かなければ、この調査は、私たちの自己満足で終わってしまうからである。第 3 に、ゴミ拾いは大人を含めた住民全員と一緒にやることを実行することである。ゴミ拾いに子どもたちは参加してくれたが、大人たちの参加は無かった。落ちていたゴミの発生源は、大人が村の外で買ってきたものが多い。昔のゴミは、食べ残しなど土に還るものが多かったが、技術の進歩によって、ビニールゴミやペットボトルなどの土に還らないゴミが主流になっている。それを以前と同じように扱っていたら、ゴミが落ちている状況になることも大人も理解ができるだろう。第 4 に、住民への動機づけを行うことを挙げる。私たちにとってゴミをゴミ箱へ捨てることは、当たり前のことである。しかし、モン族はそうではない。だからといって、私たちの習慣を押し付けることはしてはならない。住民の生活に関連づけて説明し、ゴミが落ちていないほうが自らの安全を守ることにつながることを認識してもらう必要がある。最後に、ゴミ拾いは、今後スタディツアーに参加する日本人学生に、引き続き行ってもらうことである。ゴミ拾いを繰り返し行うことで住民の関心をひき、動機づけを行い、シャンティ山口や私たちの活動が終了した後も村に「ゴミを捨てずに、きちんと処理する」ことが根付くことを期待する。



【拾ったゴミ】



【園児とゴミ拾い】

## おわりに

今回私たちは自立と交流の重要性について学んだ。山岳民族に対し政府の支援があまり行きわたっていない。より多くの人に山岳民族について知ってもらうことが重要であると考えます。他国に関心を持ち、自国を見つめなおすことや自国の文化や知識を知ることが大切である。

今回モン族と生活する中で、将来的に団体の支援が無くなっても、彼らが自立し、生活を営める環境を作るためには、人々の意識を変えることが重要となってくることを知った。自立支援が成立するためには、一人ひとりの意識の自立が大切である。

今回学んだことを広めていくと同時に、将来の進路や大学での学習に役立てて、今後更にグローバル化する社会に貢献出来る人材になれるように、私達も自立し、夢に向かって努力することが重要である。

## 《参考文献・URL》

- ・ 特定非営利活動法人 シャンティ山口 <http://www.shanti-yamaguchi.com/> (2013/09/18 閲覧)
- ・ 杉谷剛記者新聞記事 [http://file.kenkenbicycle.blog.shinobi.jp/20120917\\_3.JPG](http://file.kenkenbicycle.blog.shinobi.jp/20120917_3.JPG) (2013/09/17 閲覧)

- ・ 上野敏子『希望の家を支える会』 <http://www.sunnyside.jp/kibounoie/sangaku/> (2013/9/21 閲覧)
- ・ 第 2 章国際文化交流の現状と課題  
<http://www.bunka.go.jp/1kokusai/kokusaikondankai2.html>(2014/01/17 閲覧)
- ・ グローバリズムと多民族・多文化社会—中国の現実、世界の課題—  
<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/IReC/pdf/200903china.pdf#search='%E5%A4%9A%E6%B0%91%E6%97%8F%E3%81%AE%E8%82%B2%E6%88%90+%E6%96%87%E5%8C%96'>(2014/ 01/17 閲覧)
- ・ 東京都教育委員会 [http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/dentou\\_top.htm](http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/dentou_top.htm) (2013/12/04 閲覧)
- ・ 鶴見ほっこり村, 概要  
<http://hokkorimura.jimdo.com/app/download/6330602158/%E9%B6%B4%E8%A6%8B%E3%81%BB%E3%81%A3%E3%81%93%E3%82%8A%E6%9D%91+%E6%A6%82%E8%A6%81%EF%BC%88%E2%96%A0%EF%BC%89.pdf?t=1341069045>(2014/01/08 閲覧)
- ・ livedoorNEWS <http://news.livedoor.com/article/detail/4702824/>(2013/10/9)
- ・ 国際連合広報センター [http://www.unic.or.jp/news\\_press/messages\\_speeches/sg/5549/](http://www.unic.or.jp/news_press/messages_speeches/sg/5549/) (2013/11/30 閲覧)
- ・ モンサント社ホームページ <http://www.monsanto.co.jp/> (2013/09/23 閲覧)
- ・ 食の安全 常識・非常識 <http://wedge.ismedia.jp/articles/-/2498> (2013/09/23 閲覧)
- ・ 『わが国の NGO 団体における難民定住支援』  
[http://www.mizuho-c.ac.jp/images/library/kiyo\\_05/amckiyono05-03.pdf](http://www.mizuho-c.ac.jp/images/library/kiyo_05/amckiyono05-03.pdf)(2013/11/22 閲覧)
- ・ 2,012 年版政府開発援助白書『日本の国際協力』(2013/11/22 閲覧)